

ミサのオンライン配信 についての注意点

主日および守るべき祝日には、信者はミサに与かる義務があります（教会法 1247 条）。しかし、コロナ感染拡大防止のために、教区司教が、与えられた権限によって、信徒がその義務を果たすことを免除することができます（同 87 条）。教会は、信者が重大な理由によってミサに参加できない場合、個人または家庭で祈りのときを持つように勧めています（同 1248 条 2 項）。

公開ミサの中止とミサに与かる義務の免除に応じた措置として、ミサの映像配信が行われます。信徒が主日に各自の祈りのときを持つこと、霊的聖体拝領の助けとするためです。

ミサは本質的に、人びとが同じ場所に集まって執り行われるものです。したがって、実際のミサに与かることと、ミサの映像配信を視聴することは、厳密に区別されなければなりません。聖体の秘跡であるミサへの参与に代わることは決してありません。

また、第二バチカン公会議文書にも、とくにミサの聖なる祭儀の放送は、司教の監督の下、慎重かつ厳粛に行うようにと規定されています（典礼憲章 20 項）。

東京教区「ミサの映像配信について」より

る人間本来の姿を見た。教区内のポジティブなこととしては、司祭たちがミサ映像配信に取り組んでいること。信徒もその手伝いを買って出てくれている。IT（情報技術）活用の必要性は以前から声が出ていた。コロナ禍によって、その取り組みの着手が早くなった。

IT を利用すれば、教会とは何か、ミサとは何か、正しい理解を広げる講座を発信できる。子ども向け、大人向けのカテキズム、結婚講座などをオンライン発信すると、教会内だけでなくいろいろな人が見てくれる可能性がある。

もう一つ、IT 利用によって会議に変化が現れた。これまで全国レベルの会議には交通費、宿泊費、食費、膨大な費用がかかっていた。それがオンライン会議によって、大幅に経費削減できた。これは大きい。

一方で、IT のことは逆に、教会としての価値を再発見した部分がある。教会とは、司教や司祭をキリストの代理者と考えると、その周りに信者が集うことを

意味している。だから、カトリック教会の本質である秘跡は教会に集まることなしにはできない。そのことは強調したい。教会に集うという習慣をなくしてはならない。

また、病者の塗油の秘跡の場合、病気の信徒はたとえ月一回の訪問であつてもとても力づけられている。だから、病者は司祭を待っている。これは忘れてはならない。司祭が病人を訪問することには大きな価値がある。それを再認識した。

最後に教区民にメッセージを。

前田 コロナ禍は、潜伏時代のキリシタンみたいだと言った人がいた。公開ミサに参加したい、聖体を拝領したい望みを持っている人だと思う。信徒の皆さまには、司祭を待ち望み、秘跡を受けたいと望みつつ信仰を守ったキリシタン時代の信仰に学んでほしい。

キリシタン時代はしっかりしたカテキズムがあったので、正しい信仰を持ち続けることができた。だから、カテキズム（福音宣教）はネットを使ってどんどん発信してほしい。また、集うことの喜びを強めるようなものをオンライン発信できればと思っている。

海外へ行くことができないので、日韓司教交流会は中止されている。バチカンの会議もオンライン。昨年、バチカンで行われた新しい枢機卿の叙任式にはウェブ参加したが、私のときには新枢機卿は式の最後に教皇と抱擁し、そこで言葉を交わした。それが感動的なのだが、そのような抱擁はできなくなっていた。感じが出ないと思った。やはり、カトリック教会が培ってきた良い伝統を守ってゆく必要を感じた。

信徒の中でも厳しい状況に立たされている人がいるのでは？

前田 苦しんでいる人は多いと思う。助け合って何とか出来ている人もいるが、行き詰っている人もいる。外国人信徒からも救助を求める声があった。互いに助け合うだけでなく、助ける仕組みを作ることが大切だと思う。

他宗教のコロナ禍への対応①

神道の場合

—— 話 上村宜道宮司（兵庫県尼崎市生島神社）

コロナ禍は、人類の歴史の一つに過ぎないと思う。疫病は紀元前から歴史上いつもあったので今に始まったことではない。

神道は自然と共に自然的に発生したもので、当然、大雨、山火事、干ばつなどの自然現象と同じく、疫病も自然の一つの現象として向き合ってきた。農作物の五穀豊穡と疫病退散は同じように祈られてきた。どちらも人の命をつなぐためには同じだけ大切だった。だから本来、疫病の時にこそ神事（祈り）をすべきだと考えている。

京都の祇園祭、茅の輪くぐり等の疫病除けのお祭りは全国に多く存在する。疫病が流行っているのに、神事や人々の祈りを取り止めてしまうことは、本末転

倒ではないだろうか。

生島神社では、新型コロナウイルス発生時、メディアの情報と合わせて、地域の情報、自治会や子ども会など、神社周辺地域の方向性に合わせて、神社も動いてゆくということになった。昨年 4 月 14 日の春祭りは、役員のみが参列し、神主が御神前で春祭祝詞と併せて疫病鎮静祈願祝詞を奏上する形にした。その後、会館で直会という食事会をするのだが、それは中止にした。

例年、正月は多くの参拝者が訪れる。今年は、アルコール消毒やマスクを常設し、ソーシャルディスタンスを促すために掲示物でお知らせした。アルコール消毒器をあちらこちらに配置し、本殿の前にも足形を置いて、一定の距離を空けて参拝をしていただいた。

メディアの社寺への参拝を避けるようにとの報道もあり、正月三が日の人出はおおよそ 4 割減だった。当然神社側から参拝を控えてくださいなどのアナウンスはしなかったし、神社参拝自体の規制をすることはなかった。

生島神社境内



うことにつながるなどの懸念を抱いている。メディアが教会、神社、寺に行くのは危険と報道していたのは信じられないことだ。

初詣は減少したが、一方では多くの若い方や若い家族連れが神社に参拝されるなど、思いがけない現象もみられた。

昨年、緊急事態宣言が出た時、メディアは外に出るな、ここは危ないと盛んに報道したが、神社には多くの子ども連れの家族が境内に咲いている桜や花を見に来た。

また、7 月 14 日の夏祭りでは、例年ならば参道に夜店が並び、多くの子ども達で参道が埋め尽くされる。昨年は、地域行事を鑑みて夜店を中止にし、本殿における神事と、参道に「茅の

他宗教のコロナ禍への対応②

仏教の場合

—— 話 前田信剛住職（大阪府大阪市浄土宗智源寺）

お寺では、盆に施餓鬼というたくさんの方が集まる行事がある。例年、智源寺で 300 人から 400 人が参加される。このような大きな行事については、皆様の参加を辞退していただいた。寺によっては YouTube など配信するところもあったが、智源寺では Zoom を使うことを検討したが、諸般の事情で行わなかった。

施餓鬼は餓鬼に施すと書く、しかし、浄土宗には餓

輪」の設置、夜間神楽だけをすることにした。ところが一昨年の倍の人が夜間神楽に来られた。その原因を探ると、インターネットで「疫病」を検索すると、「疫病除け」の項目にヒットし、そこに「茅の輪くぐり」が出てくるので、それを見て、疫病退散を祈るために参拝された家族が多かったようだ。インターネットで情報を得て、初めて茅の輪をくぐりに参拝した人も多かった。神社は本来、祈りの場であり、地域コミュニティの場なのだから、それはそれでいいことだと思った。自然的に来社される状況が生まれたことは、本来の「祈り」を考えた時、非常に大切なことだと思う。

鬼はいない。なぜならば亡くなれば皆、極楽へ行くから。餓鬼はこの世に生きている人の心の中にあると考えるので、寺に来ていただいて祈ることが大切——そう考えると、ネットでの参加には踏み切れなかった。大きな行事については、お寺ごとの温度差があったが、浄土宗自体としては、やはり自粛するように勧告がでていた。しかし、それぞれの寺に宗教法人があるので、統一感はない。コロ